

線香花火

池松 孝子

子供の頃の夏の思い出の一つに線香花火がある。庭にバケツの水を用意するように親から注意され、兄弟、近所の友人が集まり地面に立てたろうそくに火をつけ、ひとり一本ずつ手にした線香花火に火をつける。そして誰のが一番長くもつかを競った。

線香花火に火をつけてから玉が落ちるまでわずか数十秒だという。その間を四つの段階に分け変化を楽しむ日本人の感性は面白い。まず「つぼみ」と言われる点火直後。パチパチと火花を散らす。次は「牡丹」で、玉が大きくなり、牡丹の花のように力強い花が一気に咲く。三段階は「松葉」で、火花が四方八方に散る。最後の四段階は「散り菊」で火花が消えていく。最後には残った火玉が重そうにぶら下がる。わずか数十秒に過ぎない花火の命をここまで深く感じ取る楽しみを知る。

まだ落ちぬ線香花火のひとつ

稲畑 汀子

日本の玩具花火の代表は何といっても線香花火だ。西日本に多いのがすぼ手、東日本に多いのが長手。すぼ手は藁^{わら}や竹ひごの先にむき出しの黒色火薬をつける。長手は和紙で作った紙縫^{こぎり}りの先に黒色火薬を包み込むもの。関西を中心に作られたすぼ手は、やはり稲作が盛んだったことによるのだろう。一方、江戸では藁^{わら}が手に入りにくかったのがその一因らしい。

すぼ手は線香花火の原型で、公家の遊びだった。今のようには手に持って楽しむものではなかった。縁側に置いた盆栽鉢の灰に線香花火を何本か挿して、パチパチと弾く火花を楽しむ様子が浮世絵にも見られる。線香花火の名前は、仏壇に供える線香からだという。

江戸時代に花火が盛んになり、大規模な打ち上げ花火が流行した。それと同時に子供向けの玩具花火も流行した。両国川開きでは子供が線香花火を売り歩いたらしい。しかし、次第に安価な中国産の花火出回り、一九九八年頃になると国産製造会社はわずか一社になったともいわれた。今も国内シェアは数パーセントに満たないが、仕方ないことが。